
プリン

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリン

【Nコード】
N0793H

【作者名】
羽村奈留

【あらすじ】
主人公、友則。プリン騒動の話です。『犯罪が出てこないミステリー企画』投稿作品です。

第1話

冷蔵庫にあったプリンがなくなった。プリンは全部で10個あった。

高校2年生の友則が、昨日の下校途中に現在交際中の彼女から北海道旅行のおみやげにともらったのだ。

昨日、彼女からプリンをもらったと自慢げに話した友則は、1つずつ食べてもいいよと家族に伝えた。

友則の家族は、友則を含めて6人。祖父と祖母。父と母。友則と妹である。

友則はその日のうちにプリンを1個食べた。

プリン耐熱ガラスに入っており、ソフトプラスチックの蓋がしてある。自然素材のみで作られた無添加のプリンは、濃厚な牛乳と卵の味がして、多少の弾力があり、舌の上で崩れていく触感と同時に甘さが口の中に広がり、とてもおいしかった。

友則から話を聞いた家族は、彼女と仲の良い友則を冷やかしながらも、滅多に食べれない北海道産のプリンに心を躍らせて、それぞれが友則に礼を言った。

これが昨夜の話。

そして今朝。友則は朝ご飯のあとにプリンを食べた。

その時は、まだ箱にプリンが8個あった。家族は誰も食べていないのだ。

その後、妹が起きてきて友則の目の前でプリンを食べた。妹は中学生でクラブの朝練習で誰よりも早くに出掛けるため、友則がテレビを観ているうちに、手早く支度をして学校へ向った。

冷蔵庫のプリンは、その時7個残っていた。

その次に父が起きて来た。父が朝食を食べている時に、友則は家を出た。

友則は昨日と今朝でプリンを2つ食べた。妹は1つ食べている。

単純に計算しても、本日中に家族全員がプリンを食べれば、残りは3個になる。なのに、友則が高校から帰ってきて冷蔵庫を開けた時、プリンは1つも残っていなかった。

友則は冷蔵庫を覗いて愕然とした。冷蔵庫の中には、プリンが入っていた箱がある。しかし、箱の中はプリンが1つも無いのだ。あるのは、プリンについて記された説明書のみ。

友則は、箱の底にあった説明書を見た。

説明書には、北海道の環境や卵と牛乳などの自然素材のみで作られたプリンが、いかにおいしいかが記されている。

彼女からもらったプリンがなくなってしまった一大事の時に、悠長に説明書を読んでいる場合ではない！

友則は、説明書を箱に入れてから、冷蔵庫を閉めた。

「お袋。プリンが無い！ 全部無い！」

友則は、隣の居間でのおんびりとテレビを観ていた母親に言った。

母親は韓流ドラマを観ていた。邪魔をしないでとばかりに、振り返って不快な表情を友則に向けた。

「プリンの事くらいで、騒がないでよ。テレビの声が聞こえないじゃない」

「お袋。プリン、いくつ食べた？」

友則の質問を聞いた母親は、体の向きを変えてテレビに向き直る。テレビを観ながらぼろりと答えた。

「まだ1つも食べてないわよ。朝から忙しくて、プリンを食べる暇なんて無かったわよ。このドラマが終わったら食べようと思っていたのに」

母親の体重は83キロ。甘いもの好きな母親が「まだ1つも食べてない」という証言は怪しい。

友則は、祖父と祖母がいる居間にも行った。

祖母もテレビを観ていた。祖母が観ているのは録画した時代劇だった。祖父も将棋の雑誌を読みながら一緒にテレビを観ている。二人の前にあるちゃぶ台には、空になったプリンの耐熱ガラスの容器

が一人分あり、容器の中に使用済みのスプーンが入っていた。

第2話

友則は、中味の無いプリンの容器を見て言った。

「じいちゃん。ばあちゃん。プリン、食べたんだ。おいしかった？」

祖父と祖母は、同時に顔を友則に向けた。

祖父は顎を下げて老眼鏡のレンズの上から眼を出して友則を見ながら言った。

「ああ。おいしかった。友則の彼女がくれたんだって。美人なのか？」

予想しなかった質問に友則が言葉を詰まらせていると、今度は祖母が言った。

「おじいさん。友則が困っているじゃありませんか」

祖母は白髪のショートヘア。ちやぶ台はそれほど大きくないのだが、それでも祖母の体はすっぽりとちやぶ台に納まってしまっほうほど小さい。祖母は、小柄な体型の上にある小さな顔を揺らしてニコニコしながら続けて言った。

「彼女さんに、有難うって、伝えておいてね。おいしかったって」
「うん」

友則は返事をしてから、祖父母がいる居間をあとにした。

祖父母の様子から、残りのプリンを全部食べたとは思えない。

友則は、二階にある妹の部屋へ行った。妹は既に帰ってきていて勉強机で宿題をしていた。

「おい！」

「知らない！」

妹は友則の顔を見ずに言う。

友則が声を掛けてすぐの返事が「知らない」とは、かなり怪しい。

「何！？」

「うるさいなー。勉強の邪魔。あっちへ行つてよ」

しかも妹は、勉強を理由に友則を牽制する。

友則は思った。絶対に、こいつ、プリンを二つ以上食べてるぞと。

「お前、プリンを全部食べたたる？」

「食べてないよ。私が帰って来た時には、もうなかったんだから」「なんだと！」

友則は驚愕した。妹が帰って来た時には、既にプリンは全部なくなっていたようだ。

だが、しかし。妹が嘘をついている可能性もある。現に妹は、学校から帰ってすぐに冷蔵庫を開けてプリンを確認している。確認をしたという事は、妹はプリンを更に食べようと思っていた可能性がある。

「お前。プリンがあつたら、食べてただろ？」

「食べないよ。昨日、お兄ちゃんから一人1つずつって言われているから」

「じゃあ、なんでプリンが全部無いつて知ってんだよ？」

「ジュースを飲もうと思って冷蔵庫を開けたら、プリンが入った箱の蓋が開いていて、もう箱の中はカラになっていたからよ」

「箱の蓋が開いていたって!？」

友則は、またもや驚愕した。友則が冷蔵庫を開けた時は、蓋は閉じられていた。蓋を閉じたのは妹なのだろうか？

「蓋は、お前が閉じたのか？」

「ううん。触ったら何か言われると思ったから閉じてないよ。お兄ちゃん。いつもうるさいから」

妹は友則の顔を見ずに宿題をしながら言う。

第3話

妹がプリンを食べたあとに蓋を閉じた可能性もあるが、妹の証言を信用したとすれば、妹が中学校から帰ってくる前に、誰かがプリンを全部食べた事になる。

妹の次に怪しいのは母親だ。なぜなら、専業主婦の母親が一番冷蔵庫を開ける回数が多いからだ。

友則は、また母親がいる居間へ行った。

「お袋。プリンが入っていた箱なんだけど、お袋が冷蔵庫を開けた時、箱の蓋はどうなっていた？」

「箱の事なんて、いちいち覚えてないわよ。友則！ たかがプリンの事で騒がないの。いい加減にしないさい！」

韓流ドラマに夢中になっていた母親は、再度友則に邪魔をされて、ついに怒った。

「あんだね。プリン。プリンって騒ぐけど、宿題はやったの？ 誰が高校の学費を出していると思ってるの？」

なくなったプリンの事で騒いでいた友則は、当然宿題をやっていない。友則は、母親の更なる怒りが見えるようで、返事ができず、黙って居間をあとにした。

誰がプリンを食べたのだろうか。一番怪しいのは、声を掛けてすぐに「知らない」と答えた妹。二番目に怪しいのは、宿題や学費を理由にプリンの話を遮った母親。父親が残っているが、父親は甘いものをあまり食べないため、プリンを全部食べたと考えるのは無理がある。

結局、どうする事もできなくなった友則は、最後の手段、冷蔵庫に貼紙をした。

『もう騒いだり怒ったりしないので、プリンを1つ以上食べた人は、正直に俺に言っ下さい。友則より』

その後、友則は二階にある自分の部屋へ行った。宿題をするためである。

失意の友則が宿題をしている間に、父親が帰って来た。

母親は、友則が騒いだプリン事件の経緯を父親に話した。

話を聞いた父親は冷蔵庫の前に立った。

「それで、冷蔵庫にこの貼紙があるのか」

「そうなのよ。たかがプリンくらいの事で、こんな貼紙までして、みつともない」

台所で夕食の準備をしている母親は、不機嫌な声で父親に言う。

父親は、風呂に入る準備をするためにネクタイを外しながら冷蔵庫の貼紙を眺めていた。

「そういえば、プリンがあっただったな」

「そうなのよ。私も、友則が騒ぐまで、プリンの事は、すっかり忘れていて」

「で。誰がプリンを全部食べたんだ？」

「私も知らないのよ」

「そうか」

父親は、外したネクタイを手にとって、風呂場へ行った。

今夜は、6人揃った夕食だった。

父親は風呂上りのあとのビールを飲んで上機嫌になっている。祖母父母は、マイペースに入れ歯を動かしながら食事を摂っている。母と妹はお笑い番組を見ながら一緒に笑っている。友則だけが物静かに食べていた。

誰もプリンの話をしない。冷蔵庫には今も友則が書いた貼紙がしである。

夕食が終わってから、貼紙はそのまま冷蔵庫のドアについていた。結局、プリンを1つ以上食べた者は名乗りを上げなかった。

友則は、歯磨きをしながら貼紙を見て考える。よく考えれば、自分以外全員が怪しいのではないかと。

いろいろと思案しながら冷蔵庫の前で歯磨きをしている友則を、母親は物陰から静かに見守っていた。

翌朝。友則は冷蔵庫を開けてから仰天した。

なんと！ プリンが10個、箱の中にあるのだ。

「お袋。プリンが10個ある。なんでだ？」

「あら、ホントだね。なんでかしら」

母親は、朝食用のだし巻き卵を焼きながら言う。

友則は、突如現れたプリンを呆然と見るしかない。

プリンは、なぜ全部なくなり、翌朝、友則が食べたはずのプリンまで復活していたのか！？

友則は、またもや復活したプリンの事で大騒ぎをしたが、謎は未だに解明されていない。

社会人になった友則は今も思い出す。

最初に食べたプリンの味と、復活したプリンの味が同じだったのを。

家族の誰かが作ったとしても、おみやげと同じプリンの味を再現するのは不可能ではないか。

もし味の再現が可能だったとしても、家族の誰が北海道産のプリンと同じものを作ったのか。

それも未だに謎である。

さあ、読者の諸君。このトリックと犯人が分かるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0793h/>

プリン

2010年10月8日13時58分発行